

学年	教科等	単元(題材)名	日時
第5学年	体育科	ぐうっと ジャンプ Go two チャレンジ (器械運動【跳び箱運動】)	令和6年2月9日(金)

## 1 本時の目標

自己の能力に適した技を、より腰や足を高く上げて行うための動きについて、考えたことを言葉や動作で他者に伝えることができる。

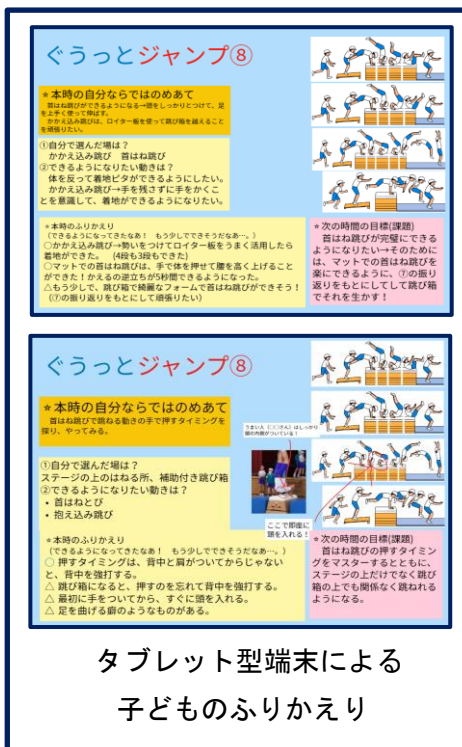
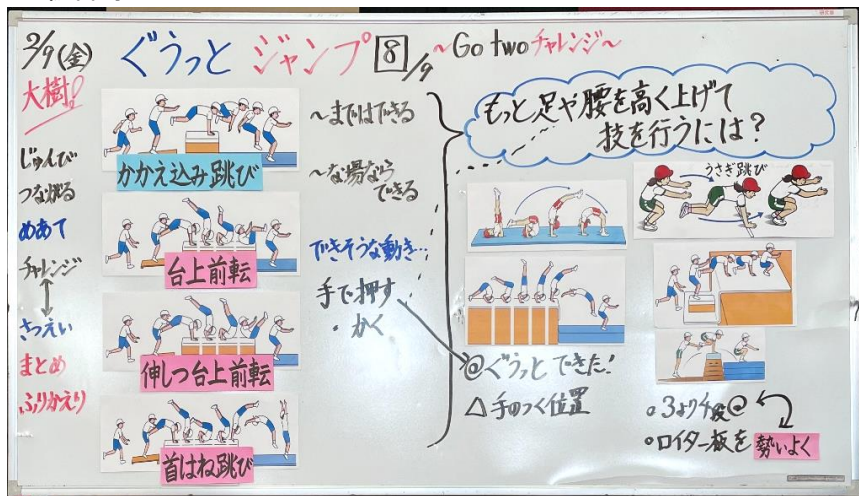
## 2 指導過程

学習活動及び学習内容(★は評価にかかわるもの)	「自律的に学ぶ」ための手立て
<p>1 学習の準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 場の準備→準備運動</li> <li>○ 主運動につながる運動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ かえるの足打ち、うさぎ跳び、頭倒立 等</li> <li>・ 支持での跳び乗り(またぎ乗り)、またぎ下り等</li> </ul> </li> </ul> <p>2 本時の学習課題をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本時の学習課題 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>もっと腰や足を高く上げて技を行うには、何が必要な。</p> </div> </li> <li>○ 自分ならではのめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伸膝台上前転で、もっと腰を高く上げて、膝を伸ばしながら回転する。</li> <li>・ もっと足を高く上げて頭はね跳びができるようにする。等</li> </ul> </div> </li> <li>○ 自己の課題の解決に必要な動きの見直し <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伸膝台上前転で膝を伸ばして回転するには、もっと勢いよく踏み切って腰を高く上げるとよいのかも。</li> <li>・ 頭はね跳びで体を反らせながら跳ねるには、跳び箱をもっと強く押すようにするとよいのかも。等</li> </ul> </div> </li> </ul> <p>3 自己の課題に応じた場を選んで技に挑戦する。(★)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自己の課題に応じた場の選択 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>△ 腰を高く上げて台上で回転する動きが難しい。 → 低い跳び箱(1～3段)での(伸膝)台上前転。</li> <li>△ 体を反らせて跳ねる動きが難しい。 → ステージ(台上)からのブリッジ、首はね跳び。</li> </ul> </div> </li> <li>○ 易しい場であれば、発展技に挑戦できる。 → 低い跳び箱(1～3段、横向き)でのかかえ込み跳び。</li> <li>○ 技のできばえの確認・ふりかえり <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>※ 活動の状況に応じて行う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 動きの撮影、視聴を行う。</li> <li>・ 仲間と気付きを交流する。</li> <li>・ 発展技のイラストや前時までの動きと比較し、できばえを分析する。</li> <li>・ 技(動き)の習得に向けて、繰り返し練習する。</li> </ul> </div> </li> </ul> <p>4 本時の学習をふりかえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 同じ課題をもつ仲間との学び <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ○○さんは、段々と腰を高く上げられるようになってきたね。私も、ロイター板をもっと上手に使いたいな。</li> <li>・ 跳ねる動きができるようになってきたから、△△さんに跳ねるタイミングのこつを教えてあげたいな。等</li> </ul> </div> </li> <li>○ 個人の学び(次時の目標・課題) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 助走からの勢いを使って強く踏み切ると、腰を高く上げることができた。次は、□段での伸膝台上前転に挑戦したい。</li> <li>・ はね跳び系の技は、ぴたっと着地することが難しい。もっとふわっと跳ねることが必要なのかな。</li> </ul> </div> </li> </ul>	<p>「手でぐうっと支えているかな?」「腰の高さはどうかな?」等、課題の解決に必要な動きを意識させる声かけを行うことで、学習課題を自分事として捉え、本時の学習につなぐことができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習課題の解決に何が必要かを問う。そして、自己の動きの高まりや解決したい課題を想起させることで、学びの足跡や学びのデザインを確認しながら、自分ならではのめあてをもつことができるようにする。</li> <li>○ 自己の課題の解決に向けて意識する動きを問う。そして、「手でぐうっと支えながら腰を高く上げる」「体を反らせながら跳び箱を強く押す」等、自己の課題を基に思考させることで、腰や足をより高く上げる動きを意識して技に挑戦できるようにする。</li> <li>○ 学習課題の解決に必要な動きを、跳び箱に着手した後に腰や足を高く上げる動きに焦点化し、互いの動きを評価しながら技に挑戦させることで、同じ課題をもつ仲間と協働的に学びを深められるようにする。</li> <li>○ 技(動き)の習得状況に応じて、適宜声かけを行う。その際、左記に示す方法等を選択して活動するよう促す(技のできばえの確認・ふりかえり)。</li> <li>○ 仲間の動きを撮影させながら、技のできばえを捉えさせる。それを基に、個々の課題に応じた気付きを交流させることで、仲間へのアドバイスや自己の動きの修正につなげることができるようにする。</li> <li>○ 学びのデザインの確認や動画の視聴を基に、「何ができるようになってきたか。」をふりかえらせる。その後、「次時はどうしたいか。」を思考させることで、技能の習得状況を客観的に捉えながら、自己の動きをよりよく高めていくことができるようにする。</li> <li>○ 腰や足をより高く上げて技を行うための動きについて、タブレット型端末に入力させる。そして、各々の気付きを、子どもとともに全体で整理することで、自己の動きのよさを自覚したり、次時の目標・課題を見通したりすることができるようにする。</li> </ul>

### 3 本時の評価規準

「膝を曲げ伸ばししながら強く踏み切る」「両手でぐうっと跳び箱を押す」等、腰や足をより高く上げるための動きについて、言葉や動作で他者に伝えることができている。(思考・判断・表現)【行動分析・記述分析】

### 4 板書等



タブレット型端末による  
子どものふりかえり

### 5 指導講評

#### 【宮崎県 スポーツ振興課 財津 吉正 指導主事】

- 「自立的に学ぶ子ども」の育成とは、主体的な学び、対話的な学び、深い学びという視点から授業をよりよくしていくことではないかと考えられる。特に主体的な学びの実現のためには、目標を立てること・見通しをもつこと・ふりかえることの3点セットが必要である。そして、子どもが自分の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するのかが重要になってくる。何のためにするのか、何をふりかえるのかなどを明確にし、学習の見通しを立てたり、学習をふりかえったりする場面を意図的に仕組むことが大切である。また対話的な学びの実現のためには、ただの話合いで終わることがないように、自分の考え等を広めたり、深めたりする場面をどこに設定するのが重要である。例えばグループで、できたこと・できなかったこと、あるいは何を学んだかなどについて話し合わせ、十分に交流させた後に、各自タブレット型端末に記入をさせることも考えられる。教師が、「いいね」とか「なるほど」という声かけをしたり、あるいは子どものモデル的な発言を全体で取り上げたりしながら、対話によって子どもが自己の考えを広げたり深めたりできるようにすることも大切である。
- 技能及び主体的に学習に取り組む態度等の評価については、一定の学習期間が必要であることや、主に観察によって評価を行うことから、指導後に一定の学習期間あるいは評価期間を設けることが必要になってくる。本時のように、思考・判断・表現の評価については、主に学習カード等に記載された内容から評価の材料を得る場合が多いことから、指導してすぐに評価することになる。ロイノートのような記録の仕方に加え、子どもの発言等の観察によって得られた内容も加味したうえで、評価の妥当性や信頼性を高める工夫が必要になる。参観者への伝わりやすさを考えると、判断の目安や想定されている子どもの様相等を例示しておくとうい。

### 6 考察

- 導入において、自己の動きの高まりに関するつぶやきを拾って全体で共有することで、解決したい自己の課題を想起させることができた。また、学びの足跡や個々の学びのデザインを基に、腰や足を高く上げる動きについて全体で再確認することが、学習課題を自分事として捉え、自分ならではのめあてをもって運動に多様にかかわろうとする動機付けとなったと考える。
- 自己の課題に応じて選択した場で技に挑戦する段階では、同じ課題をもつ仲間と、身体との対話をとおして協働的に学ぶ姿が随所に見られた。これまでの学びをつなぎ、仲間とともに場の調整を図りながら自己の動きをよりよく高めようとする姿は、まさに自律的に学ぶ姿と言えるのではないかと考える。